歓迎のご挨拶

第54回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会を開催するにあたって

この度は、伝統ある本学術集会を鹿児島大学産婦人科学教室で担当させていただくことになりました。非常に光栄なことであり厚く御礼申し上げますとともに、責任の重さに身の引き締まる思いです。産科婦人科内視鏡学会を鹿児島で開催致しますのは、先代の永田行博教授が第29回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会を平成元年８月４～５日に、今回と同じ城山観光ホテルで開催して以来25年ぶりのことです。当時の本学会学術講演会は、マイクロサージャリー学会学術講演会（８月３日開催）とペアーになって開催されていました。内視鏡学会の事務局が川崎市立川崎病院産婦人科におかれていた時代です。私が当時の学術講演会の事務局を担当しておりましたことに、何かの因縁を感じます。当時の学会回顧録をみてみますと、次のように回顧しておりました。「、、、引き続き８月４日、５日は内視鏡学会が行われた。実に280人余りの参加者が集まった。一般演題53題（ビデオセッション４題を含む)、２日目にはシンポジウムが開催された。電子腹腔鏡、、、卵管鏡、second look laparoscopy（不妊症の術後の癒着の検査目的）などの演題が目に付いた。内視鏡学会とは新しい内視鏡を使い、何をどのように観察するかを討論する学会のようだ」と結んでいます。26年前の内視鏡が腹腔内を観察するので精一杯であったことが窺い知れます。今日の産婦人科内視鏡の隆盛や爆発的な会員数の増加を考えますと昔日の感があります。

今回の本学術講演会のメインテーマは“－和をチカラに－”と致しました。これは“－輪を力に－”に通じるものがありますし、“和が輪になる”ことを意味しています。内視鏡手術の技術の上達、安全性の向上には医師団のチームワークや他施設との連携、綿密な情報交換が非常に重要であるという意味を込めたものであります。看護師（手術室、病棟）や麻酔科医などとのチームワークやコミュニケーションも大事なことは言うまでもありません。頂戴致しました演題は、シンポジウムなどの指定演題の48題、一般演題口演439題、一般演題ポスター192題の合計679題にものぼりました。ありがたいことです。そこで、出来るだけ多くの先生方に発表して頂きたく、吉村理事長の許可を得てポスター発表を時間を区切ってのfree discussion形式と致しました。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

鹿児島は本土最南端に位置しますが、九州新幹線の全線開業で鹿児島が随分と近くなりました。多くの先生方に御来鹿いただけることを期待しております。鹿児島にしか出来ない「お・も・て・な・し」とは、焼酎で歓迎することです。鹿児島は焼酎の宝庫です。懇親会では鹿児島の焼酎の３Ｍ（魔王､村尾､森伊蔵)を準備いたしております。産婦人科内視鏡の情報を交換していただきますとともに、懇親会では３Ｍの焼酎と鹿児島の豊かな海と山の幸と、ホテルからの美しい桜島と100万ドルの夜景をお楽しみ下さい。９月の鹿児島はまだ夏だと思われます。身支度は夏服（クールビズ）で大丈夫だと思います。医局員とともに、心をこめて企画したつもりですが、至らない点も多々あろうかと思いますが御容赦願います。今回の学術講演会が会員の皆様にとりまして「輪（和）が力になる」ことを祈念申し上げまして歓迎の挨拶と致します。

平成26年８月吉日

第54回 日本産科婦人科内視鏡学会
会長　堂 地　勉
（鹿児島大学 産婦人科）